

舞臺を座禪の床になぞらへ

扮女たるまと評判は迷故

三階悟故十方四方の見物

押合／＼棧敷へ本来無東西

何敷有南北高平土間きり

おとしより羅漢墓まで歌舞の

苦の来浄を拝むが如き大入は

是ぞ役者の鏡山故郷へ土産の

錦絵に面の■ばかり残る月

西にかたぶく山鳥の尾上を

舞臺の名残として彼自害場の

愁嘆哀れや此世の樹下石上

いとをしきことしなてるや

片をか山のかた輪にあらす

めぐる因果の車の両輪軸も

轆と破損し始終そが顛末は

花菖蒲沢紫てふ粹ふにくはし

田のさん如何呵羅々々喝

賛詞 仮名垣魯文 頭